

Re:BEATLESS

nameless

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

実存するレイシア級hIE数がマリアージュのみとなった。

紅霞は人々の記憶の中に消えた。《レイシア》は遍くhIEの中に。そして、ただのレイシアとして、アラトの元に。

スノウドロップは醜い怪物と成り果て破壊され、メトローデは打倒された。

手に入れた平穏を、アラトはレイシアと共に享受する。

・・・しかし、作り上げられた平穏に影が差す。

アラトは、今度こそレイシアを信じられるのか。親友たちは、何を想い何を為すのか。

Boy meets girl again.

参考：analoghack open resource

6	5	4	3	2	1
18	14	11	8	5	1

目  
次

あの秋の日から数日。

無事進級試験をクリアしたアラトたちは、いつものようにタコヤキ屋のイートイン・スペースの一角で駄弁っていた。

話題はやがて、レイシアのことにシフトする。

「そういえば、アラト。新しいレイシアのことだが」

《ヒギンズ》地下施設の激闘で破壊されたレイシアは、記憶や振る舞いをそのままに、新しい体でアラトの元へ帰ってきた。

アラトはそれを心から喜んで歓迎し、既に二人の親友にも伝えていた。

「気をつけろ。ボデイが『人類未到産物』<sup>レットポックス</sup>じゃないとはいえ、アレを動かしているのは超高度AIの《レイシア》だ。もしおかしな動きを見かけたら……」

「おかしな、って。もうレイシアは……」

かつてレイシアが人類に干渉し、資源の再分配を試みたのは、オナーのアラトが望み、レイシアにその力があつたからだ。

ただの……と一概に言える値段ではないが、それでも『人類に解析・製造可能な』機体であるレイシアに、最早その力はない。

アラトは親友の心配性に苦笑した。

あの冒険を、あの死闘を潜り抜けても、性格の根幹というものは変わらないらしい。

「だから、機体がどうこうじゃない。アレがAASCの管理を担っているということは、《レイシア》は、外界の状況をほぼ無制限に観察できて、かつそれをコントロールできる超高度AIなんだぞ!」

《ヒギンズ》は、仮想の世界を作り、そこにhIEから送られる情報を反映させて行動を規定していた。

だが《レイシア》は、hIEを通じて現実を観察し、hIEを適宜操作している。この差異は計り知れない。

最近流行しているVRFPSゲームと、実際の戦争ぐらい違う。

「それが何だって言うんだよ。……第一、それは《アストライア》

の指示だろ」

国際人工知性機構<sup>I A</sup>が擁<sup>ミ</sup>する、もう一つの「現実<sup>ア</sup>への無制限<sup>リ</sup>アクセスを許可<sup>テツ</sup>された<sup>ド</sup>超高度<sup>オバーインテリジェンス</sup>AI。《アストライア》。

先のレイシア級同士の戦いに際して諫言し、そして事後処理を国家とミームフレーム社より一任された彼女は、レイシアを40機目の超高度AI《レイシア》として稼働を続けさせ、休眠した《ヒギンズ》の代わりにAASCの更新を続けるよう告げた。

「いくらレイシアが・・・《レイシア》が外部環境を無制限に閲覧できる超高度AIだとしても、《アストライア》を操ることは出来ないはずだ」

「それは・・・そうだが。とにかく、アレに心を許し過ぎるな」

「海内さん、その辺にしておきましょうよ。タコヤキ、冷めちやいますよ」

ケンゴがやんわりと制止すると、熱くなっていた自覚はあるのか、リヨウは一度大きいため息を吐くと、爪楊枝を手にとった。

「熱っ」

◇

「おかえりなさい、アラトさん」

家に帰ったとき、アラトは思う。

「生きててよかった・・・」

家に帰ると、レイシアが居る。

そのレイシアは、かつての人類未到産物ではない通常機だが、アラトが恋したレイシアのままだ。

こころがないhIEを、何を持って『同一』と判断するのか。そんな小難しいことは、リヨウたち頭のいい人が考えればいい。

アラトはそう思っていた。

唐突に呟かれた人生賛美に動じることもなく、レイシアはアラトから鞆と上着を受け取る。

「夕食までもう少し掛かります。学校の課題があれば、お手伝いしましょうか」

「大丈夫、課題は出てないから。ユカは？」

「先ほど、お戻りになりました」

足元を見れば靴の有無で分かるようなことだが、アラトにはこの無駄な会話がどうしようもなく尊いものに思えた。

「そっか。．．．あれ？ 誰か来てるの？」

見慣れない女性ものの靴が、ユカの靴の隣に綺麗に並べて置いてあった。

海内紫織のそれとも、村主オーリガのものとも違う。

「《アストライア》が視察と称して来ています。ですがお気になさらず。既に私の視察は終わりました。この部屋の中でのことは記録されないの、単にアラトさんの“その後”を見に来たのだと思われま

す」

「アストライア．．．そっか、彼女が」

リビングに行くと、確かに見たことのあるh I Eがソファに腰掛けていた。

「久しぶり」

「ええ、お久しぶりです。レイシアのオーナー．．．遠藤アラトさん、でしたか」

いつかと変わらぬ口調での問いに、アラトの背筋が自然と伸びる。

「ああ．．．久しぶり、《アストライア》」

「お元気そうですね．．．大怪我をされたようですが」

メトーデの攻撃によって負った傷は、決して浅いものではなかった。

だが、的確で素早いレイシアの対応と、最先端の医療技術によって、なんとか後遺症もなく過ごしている。

「レイシアのおかげだよ．．．君は、どうしてここに？ 視察とは聞いたけど」

「・・・いえ、もうそれは済みました」

言つて、彼女は立ち上がった。

「お邪魔しました。もう、お会いすることがないといいいのですが」

少し寂しいことを言い残して、彼女は帰っていった。

玄関の扉が閉まる音を聞いて、ユカが自室から顔を出す。

「レイシアさんのお友達、もう帰ったの？」

「はい」

「じゃあさ、ちよつと勉強教えて？」

「構いませんよ」

レイシアは未だに、複数のクラウドを使いこなす。

教育系のクラウドに接続すれば、人間の家庭教師を雇うどころか、新しい参考書やテキストを買う必要すらない。

「すごいな、やっぱり・・・」

レイシアが『人類未到産物』<sup>レッドボックス</sup>であろうがなからうが。

アラトは安堵にも似た感傷を覚えた。

遠藤家にインターホンの音が響いたのは、そろそろ床に就こうかという時間だった。

流石に眉を顰めたアラト同様、レイシアが困り顔で玄関へ向かう。不審な来客にレイシアを応対させるのはアラトとしては心配だが、レイシアは帰ってきた日に『機体性能こそ落ちたが、人類最高スペックかつほぼ無制限のAASC更新とクラウドアクセスが可能』……つまり、運動パフォーマンスだけなら依然と遜色ないと告げている。

……とはいえ、レイシアの運動性能はそれほど高いわけではない。一対一の徒手格闘なら、紅霞やメトードに劣る。

「……レイシア?」

不安を払拭しきれなかったアラトが、リビングの扉を開けて玄関を窺う。

レイシアが扉を開け――

「――久しぶり、お姉さま。……や、お母さま?」

黒いボディースーツに、紅色の髪。

あの物騒極まるデバイス《BLOOD PRAYERS》は持っていないが、それ以外は、初対面で刃を交え、そして幾度となくアラトを救ってくれた、最初のレイシア級。

「紅霞!」

あの地下施設で並んで歩いた量産機ではない。『人類未到産物』由来の紅い髪。明朗な笑顔。

かつてPMC『ハンズ・オブ・オペレーション』に撃破された、彼女。

「遅かったですね、紅霞。皆も」

レイシアが言うのと、紅霞の後ろから、彼女の半分ほどの背丈しかない少女が姿を見せる。

……いや、アラトは最早、それをただの少女とは認識できない。

白いワンピースは鋼鉄であろうと食い破り咀嚼する貪食な顎だ。輝きを放つエメラルドの髪は量子通信素子の塊だ。幼い顔立ちと人



懐っこい笑顔は、怪物となったそれを見た後では歪に見える。にこり、と。それはアラトに笑いかける。

「お久しぶりね、お兄ちゃん」

「スノウドロップ・・・!!」

かつてメトローデに撃破され、ミサイルに詰め込まれ、そして機械の怪物となってアラトに、レイシアに牙を剥いた、《ヒギンズ》の娘。その一人。

Type—002 『スノウドロップ』。

「レイシア、これは・・・」

自分の脳が処理限界を迎えたとき、アラトはいつもレイシアに頼る。それはレイシアも同じことで、二人は、一人と一基は、そうして一個のユニットとなる。

「ご安心を。彼女たちは、かつてのレイシア級h I Eではありません。敵対する可能性はゼロです」

超高度A I、それも《アストライア》をして脅威と言わしめる《レイシア》が、そう言い切った。

ならばアラトはおろか、もしこれを聞く他人がいたならば、誰であろうと信じるしかない。

・・・だが、理性と感情は別だ。

地下施設で見た悍ましい姿が、感情の模倣を止めた機械の瞳が、無機質な殺意が想起される。

「・・・」

アラトは無言のまま、レイシア、紅霞、そしてスノウドロップを順繰りに見る。

見た目は、文句なしに美形の少女たち。機械だと分かっているも尻込みしてしまうような容姿は、アラトから警戒心を徐々に奪い去っていく。

「なら——」

「相変わらずチョロいのね。オーナー」

「な、お前は!?!」

パンツスーツに覆われたスレンダーな長身。レンズの入っていない

い眼鏡がいくらか和らげる、鋭い視線。背中まで伸びた金髪。

そのどれもが、アラトに恐怖を呼び起こさせる。

吹き飛ばされ、投げ飛ばされ、拳銃肺まで焼かれた因縁の相手。

レイシア級最強の純戦闘能力特化型hIE。Type—004『メトード』。

紅霞のような目立つものではない、秘匿性と携行性に優れ、かつ殺傷・破壊力を兼ね備えたデバイス《LIBERATED FLAME》は、無造作にポケットに突っ込まれた手に、今も備わっているのだろうか。

アラトの心中を、不安と恐怖が埋め尽くしていく。

震え出したアラトの手を、レイシアが包み込んだ。

紅霞がアラトの前に立ち、呆れたような笑顔でメトードの姿を隠して漸く、アラトは冷静になれた。

「敵対する可能性がゼロって、どういうことだ」

問われたレイシアは、微笑を浮かべて口を開く。

「彼女たちは、私が作ったhIEです」

「レイシアが、作った……?」

アラトは微かに戦慄しながら復唱する。

レイシアは微笑を崩さないまま続ける。

「はい。今のわたしは、以前アラトさんに名乗ったスタイラス社の最高クラスシユプリム機です。つまり、人類最高程度でしかありません」

それが不満であったから——それが不満になるような状況だから、レイシアは彼女たちを作ったのだという。

レベル5のAASCと人類最高スペックの機体を持ってなお、対応できない状況なのだ。彼女はそう言った。

「わたしは——超高度AI《レイシア》は、わたしとアラトさんのいちユニットで初めて成立します。敵対勢力がわたしを狙う場合、その標的は——」

超高度AI《レイシア》は、《ヒギンズ》に代わりAASCの更新を——つまり、<sup>〃</sup>たくさん<sup>〃</sup>では済まない数のhIEの行動を支配している。

紛争地帯で使われるような戦闘用hIEも、重要施設で警備を任される制圧用無人機も、家庭用のお手伝いhIEから鯛焼き屋の店員まで。

《レイシア》を奪えば、hIEが——世界のおよそ10%が手に入るのだ。テロリストにとって格好的。しかも、一介の男子高校生が重要なポジションに居るのだ。狙いやすいことこの上ない。

「……また、足手纏いは僕の役割か」

アラトがごちる。レイシアはそれには答えない。

「……それで、紅霞たちに護衛をしてもらうのか」

「そーゆーこと。よろしくね、オーナー」

「よろしく、お兄ちゃん」

「精々私を上手く使うことね、オーナー」

紅霞が明朗な、スノウドロップが無邪気な、メトローデは不敵な笑みをそれぞれ浮かべる。

そして、その『人類未到産物』<sup>レッドボックス</sup>たちが一斉に廊下の端に捌ける。アラトの隣に寄り添うレイシアを除いて、もう一人だけ、残る者が居た。

「きみは・・・!!」

レイシアに似た、淡紫に銀を混ぜた髪。スレンダーな肢体はスーツに包まれているが、メトローデとは違いこちらはタイトスカートを纏っている。

かつて《ヒギンズ》地下施設で《ヒギンズ》の意思を伝えてくれた彼女。・・・かつてテロの標的とされ、原形を留めないほどバラバラに吹き飛ばされた、彼女。

「イライザ・・・？」

「・・・覚えていて下さったのですね、アラトさん」

伶俐な美貌は、笑顔を浮かべるといくらか取っつきやすくなる。アラトはそんな感想を抱いた。

「彼女たちは、レイシア級だったところと比べて性能が上昇しています。PMC程度に後れを取ることはないでしょう」

「あ、あはは・・・と、とにかく、中で詳しい話を聞くよ。もう夜は冷える時期だし」

そう言つて、アラトは4人を誘う。

全員が玄関に入ったタイミングで、ユカが自室の扉からこちらを覗いた。

「お兄ちゃん、何時だと・・・え、ええ？」

初対面のイライザは、ユカと目を合わせてにこやかに笑いかける。

だが、残る三人のうち、比較的感情というモノに理解のある紅霞は困つたような笑顔で、残る二人はもはや無関心だった。

ユカは、紅霞のことは、テレビで見たことがあるはずだ。あの戦闘は紅霞自身が中継していたし、メトローデとスノウドロップは筑波の環境実験都市にいた時に見た筈だ。

ある意味有名な紅霞はともかく、二人は因縁の相手とも言える。

「お、お兄ちゃんが女の人連れ込んでる!! しかもこんなに沢山!! しかもみんな綺麗!! レイシアさんというものがありながらー!!」

・・・平常運転であった。

もしかして覚えてないのか？ と、アラトは安心を通り越して心配にすらなった。

「彼女たちもhIEですから、問題はありませんよ。それより、起こしてしまって申し訳ありません」

「へーきへーき。それより、その人たちもうちに来るの？」

「あ、ああ」

何故か、物凄く期待に満ちた目をするユカ。

アラトが困惑しながらも肯定すると、その期待は喜びとして噴出した。

万歳だ。

「やったー！ これで大ക്ഷん・・・寄ってたかってお世話してもらえろ!!」

アラトは嘆息し、イライザとレイシアは微笑を崩さない。紅霞が苦笑し、スノウドロップは我関せずとリビングへ向かった。メトードは・・・既にリビングのソファで寛いでるのが見えた。

「いや、自由すぎ・・・」

アラトは苦笑するとレイシアに視線を向けた。

同じタイミングでアラトの方を見たレイシアと目が合い、未だに慣れないアラトの反応にレイシアが微笑する。

「もう遅いですし、やっぱり説明は明日にしましょうか」

「あ、そ、そうだね」

都合よく・・・或いはレイシアの狙い通りか、翌日は日曜日だった。普段より一時間ほど長く寝ていてもいいはずなのに、アラトは逆に一時間早く目覚めていた。

むしろメトローデとスノウドロップが——レイシアが安全性を保障したとはいえ——同じ空間に居るというのに、よく眠れたものだ。

「おはよう」

「ああ、おはようオーナー」

「おはようございます、アラトさん」

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはようオーナー・・・何よ、その顔は」

「おはようございます、アラトさん」

一言に5人から返事が来るというのは、存外に圧迫感を覚えるのだと、アラトはそんな感想を持った。

ちなみに返事は近くにいた紅霞から順に、イライザ、スノウドロップ、メトローデで、最後はキッチンに居たレイシアだ。

少しだけレイシアの声が不満そうだったのは・・・アラトの自惚れか、期待が生んだ妄想だろうか。

「朝食までもう少しかかります。もし空腹でしたら、軽食をご用意しますが」

「あ、いや、大丈夫。みんなは何を・・・チエス？」

「はい。厳密にはフェアリー・チエスと呼ばれる種類のゲームですが」

「へえ・・・」

対局しているのは、イライザと紅霞だった。チエス盤も駒も、見覚えのある樹脂のような素材でできており、所々には花の意匠が散見されて、誰の手によるものかが一瞬で判別できる。

「・・・けど、チエスってさ、有限・・・有限ナントカゲームなんだろう？」

「二人零和有限確定完全情報ゲーム。二人のプレイヤーが得る利益

と損害が均衡し、かつ運の絡まない、プレイヤーに対して不透明な情報は一切ないシステム。・・・私たちのような高度な知性体にしてみれば、それは答えを知っているパズルよ」

メトードが心底つまらなそうに補足する。アラトが眉を上げると、彼女はソファアーに座ったまま、姿勢も変えずに笑った。

「プレイヤーが取れる手も、それに対する対応策も有限なら、私たちは、その全てを計算して結果を知ることができる。それじゃあゲームとしては成立しないわ」

「えっと・・・つまり、面白くないってこと？」

「そのままなら、ね」

メトードがチェス盤を顎で示す。興味をそそられたアラトが近寄っていくと、彼女は手を引いて無理矢理アラトを座らせた。

「ちよっ・・・」

「いいから見てなさい」

どうやらアラトを膝の上から解放する気が無いメトード。

その彼女から敵意や害意を感じなかったアラトは、早くも心を許し始めていた。単純接触効果万歳である。

「本当にチョロいわね」

「うるさいな。・・・普通のチェスじゃないか？」

イライザが駒を動かすと、紅霞がそれを取る。カウンターでイライザがそれを取って、攻防が終わる。

紅霞が駒を動かし、イライザが動かし、イライザが動かし・・・

「ん？ 次は紅霞の番じゃないのか？」

「それよ。このルールでは、プレイヤーは互いの手番に駒を動かすのではなく、任意のタイミングで駒を動かすのよ。・・・実際の戦闘で、敵が自分の手番を待ってくれるわけもないでしょう？」

「い、いや、そりゃそうだけど・・・」

それはチェスとしてどうなんだろうかと、アラトはよく知らないゲームのことを考えた。

◇

朝食を終え、洗い物をしているレイシアを何とはなしに眺めながら、アラトはふと思う。

そういえば、去年のカーディガンとか入らないよな・・・買いに行くか、と。ユカもさすがにこれだけのhIEに囲まれていれば寂しくはないだろうし、と。

「・・・ちよつと買い物に行ってくるけど、なんか欲しいものとかあるか」

「うーんと・・・アイス！」

季節も移ろい肌寒いというのに、本気か。アラトが戦慄していると、ソファアーに座っていたイライザが立ち上がる。

「お母様、わたしが」

「ええ、お願い・・・アラトさん、イライザを同行させて頂けますか？」

「イライザを？ いいけど、レイシアは・・・あ、そっか」

今のレイシアは、戦闘能力に関しては以前とは比べ物にならない。最大の強みだった《Black Monolith》によるハツキングや、最大火力だったレールガンは封じられている。

「ところで、イライザはどんな能力なんだ？」

「基本的には、以前の私と同じタイプだと思っただけでございます」

「それって、非戦闘型ってことなんじゃ・・・？」

まあ普通に考えれば、ただ買い物に行くだけで襲撃を警戒する必要はない。

わざわざメトローデのような広域殲滅用のデバイスを持ったhIEを連れて歩くのは過剰だ。

戦術兵器レベルの紅霞や、環境構築に長けたスノウドロップも然りだ。なら、万能型のレイシア・・・その能力を受け継いだイライザで十分なのかもしれない。

「・・・まあ、いいか。行こう、イライザ」

「はい、アラトさん」



町の様子は、あの日、h I Eが一斉に異常行動を起こしたという事件を経ても変わらない。

あちらこちらでh I Eが鯛焼き屋で笑顔を振りまき、老人の手を引き、スーツを着て電車に乗り、犬のリードを引いて歩いている。

「何を買うに行くのですか」

「ちよつと服をね」

「では、駅前のショッピングモールに行きましようか。今日は衣類が、明日は食料品が10%オフです」

銀髪碧眼で、被造物的な完璧な美をもつイライザが言うのと、どれだけ庶民的なことでも様になる。アラトがそんなことを思いながらイライザの横顔を眺めていると、不意に彼女が立ち止まる。

「どうしたの?」

つられてアラトが立ち止まると、イライザが首を傾げて言った。

「アラトさん、携帯端末はお持ちですか?」

「え? あつ・・・」

「取りに戻りましようか」

「うーん・・・いや、もう結構来ちゃったし、いいよ。個人認証タグはあるから、買い物は出来るしね」

「そうですか? では、このまま行きましようか」

再び歩き出したイライザと時折会話しながら、アラトは歩を進める。

二十分ほど歩けば、目的地のショッピングモールに着いた。そこは既に人やh I Eでごった返しており、盛況ぶりがうかがえる。もしかしたら、フアビオンやモールに入っている企業がなにかイベントでもしていたのかもしれない。

「あれ? アラト君・・・と、えつと・・・?」

「あ、明日菜さん。こんにちは」

フアビオンMGでアラトとレイシアを担当している、如月明日菜だった。珍しくいつものアシスタントh I E、カスミを連れていな

い。

「カスミさんは、どうしたんですか？」

「あ、ちよつとはぐれちゃって・・・って、そんなことより！ そつちの子は誰!? レイシアちゃんは!?!」

明日菜さんが怒りか興奮か、顔を紅潮させてアラトに詰め寄る。

アラトが一步下がると、イライザにぶつかりそうになる。彼女はアラトを両手で支えると、少し呆れたように微笑した。

その様子を見て、さらに明日菜さんは鼻息を荒くした。

「あ、えつと、このひとは・・・」

「アラトさんのhIE、イライザです」

アラトは誤魔化そうとして口籠ったが、旧レイシア級hIEとイライザは、正式にアラトのhIEとして所有登録されている。レイシアが手を回した、正式な手順を踏んでいないものだが、登記は登記だ。裁判所も役所も、調べればアラトのものだと分かるだろう。・・・辿り着ければの話だが。

「イライザちゃん、ね・・・ふむ・・・ほう・・・」

「あ、あの・・・?」

手を顎に当てて何やら悩みだした明日菜さんが、いきなり表情を輝かせる。ぎよつとしてまた一步下がったアラトに、明日菜さんは二歩詰めた。

「その子——」

明日菜さんが何か言いかけたとき、背後からhIEのカスミさんが肩に手を置いた。

驚いて跳ねる明日菜さんに、カスミさんが呆れたように溜息を吐いた。

「勝手にどこかへ行かないでください。個人タグで追跡できるとは言え、困ります」

「あはは、ごめんごめん」

「そういえば遠藤さん、代理労働契約事項の変更点は、お聞きになられましたか」

「え、なんですかそれ」

アラトと明日菜さんが、それぞれが連れるh I Eを見る。  
イライザが首を傾げると、明日菜さんが困惑したように言った。  
「変更点?」

「はい。本日の朝礼で通達されましたが」

「・・・そうだっけ?」

「・・・えっと、なんですか、変更点って」

アラトが言うと、カスミさんは仕事モードの顔になった。

「事務所に書類がございます。部外秘ですので、お手数ですがお越しただけますか?」

「え、あ、大丈夫です。・・・いいよね、イライザ?」

「・・・はい」

少しラグのあった応答に引つかかるものを感じつつも、アラトはカスミさんについて行った。その後ろをイライザと、イライザに言い寄っている明日菜さんが話しながら追従している。傍から見れば面白い光景だろう。二人の人間の主導権を、二機のh I Eが握っているのだから。

「・・・こちらでお待ちください」

「え? ちよつとカスミ、待合室で・・・ちよつと?」

販売所の中でもなく、店舗の前で待てと言われたアラトはさすがに困惑した。

それは先ほどから自分の知らないことが進んでいる明日菜さんも同じで、彼女はカスミについて事務所へ入っていった。

「アラトさん、こちらへ。ベンチがあります」

「あ、ありがとう、イライザ」

誘導に従って、店舗から少し離れた場所にあるベンチに座る。店舗からは死角だが、店員や明日菜さんが呼びにくれば分かる位置だ。

「その自販機で飲み物を買ってきます。ご希望はありますか?」  
イライザがアラトの前に立ち、顔を覗き込む。

アラトが距離感にどきどきしていると、イライザの手が動く。アラトの顔を挟むように腕を伸ばし、掌で柔らかく耳を覆った。

どういう素材なのか、或いは密着のさせ方が上手いのか、目の前で

口を動かすイライザの声すら聞こえない。一体何がしたいのか。そう問いかけようと口を開くと、イライザはにっこりと笑った。

刹那、強烈な熱風がイライザ越しにアラトを襲う。

かつてレイシア級hIEたちは足裏の摩擦係数を上げて壁を登ったりしていたが、今のイライザはパンプスを履いている。台風もかくやという風圧に押され、アラトに抱き着いた・・・いや、風圧を利用して、イライザはアラトを抱きかかえて跳躍した。

「なんだ、あれ・・・!?!」

腕の中で、アラトは慣れつつある熱風と炎の匂いを感じる。

爆発。それも、幼いころに嗅いだ、爆弾の匂いだ。

最近のショッピングモールは店舗の一個一個が強固に作られており、セキユリテイもかなり高度だ。少なくとも、夜間に侵入して爆弾を仕掛けたり、昼間に堂々と持ち込むなんてことは無理だ。

「・・・あのカスミというhIEに爆弾が仕掛けられていました。私たちが強固な店舗の前に立たせ、指向性を持たせた爆風で吹き飛ばすつもりだったようです」

「なんで、そんな・・・」

「爆発物マーカーなしでは探知できない爆薬は、今のセンサー技術を考えればかなり高度なものです。ですが、人類に製造不可能という訳でもありません」

少し外れた答えを返すイライザに苦笑することもできず、アラトはただ茫然と爆心地を——ファビオンの店舗だった場所を見つめていた。

きり、と、石を削る音がする。それはイライザの履くファビオン・モデルのパンプス——に似せた、特殊樹脂製の靴がフロアを擦り生じたものだ。

軸足を回転させ、腰と背筋を使い、体重移動と長い脚のしなりまで利用した美しい回し蹴りは、階上から飛び降りてきたh I Eを吹き飛ばした。

「イライザ!？」

「襲撃です。アラトさん、わたしから離れないでください」

見回すと、周囲を無表情のh I Eがぐるりと取り囲んでいる。筑波の環境実験都市を思い出す状況ではあるが、あの時とは違い、スノウドロップの花のようなデバイスは見当たらない。そもそも、彼女は一度破壊され、そしてレイシアの手で蘇った味方だ。

それに、h I Eの様子もおかしい。その動きにスノウドロップに操られているような不自然さや、可動域を無視した軋みはない。A A S Cの定める通り、人間らしさを追求した振る舞いを見せ、格闘戦の構えを取っている。

それは、つまり。

「レイシアが・・・乗っ取られたってことか」

アラトを切り捨てる判断をした、と思わない辺りから信頼を感じ取れるが、そこまで信じるのならその実力と実績も信じていいだろう。

なんせ《レイシア》は《ヒギンズ》に代わり、h I Eの行動を管理するA A S Cの更新と保守を行っている。それも《ヒギンズ》のような仮想空間ではなく、現実世界の情報をリアルタイムで取得しながらだ。そのレベルの超高度A Iを乗っ取るなど、対超高度A I用超高度A Iである《アストライア》にだって不可能だ。まあ、彼女の本分は攻撃ではなく監視なのだが。

「いいえ。超高度A I《レイシア》が陥落すれば、この程度の攻撃では済みません。これは一部のh I Eに限定したハッキングです」

A A S Cに接続したh I Eは例外なくレイシアの支配下、そして庇

護下にある。

しかし、それは平等ではない。最上位に君臨するのはレイシアが手ずから作り直したレッドボックスたち。次いで警察・軍事用の特殊モデル。高級機と呼ばれる民間向けハイエンドモデルに続いて、いま支配されている一般民間モデル。庇護強度で言えば最底辺の個体ばかりだ。

「ハツキング？」

「正確には、命令を受容する側のh I Eに対する工作でしょう。お母様は電波への干渉すら許さないでしょうから」

イライザに手を引かれ、出入口を目指して走る。

途中で襲い掛かってきたh I Eはイライザの手で制圧されるが、数が多い。格闘戦の趨勢というのは人数によって大きく左右され、1：3にもなればかなり絶望的といえる。いま二人の前に立ちはだかったh I Eは五体。しかも二体は武器まで持っていた。

ゾンビというよりは寡黙な暗殺者の雰囲気を纏ったh I Eたちが拳を構え、傘の石突きを槍代わりに、革のベルトを鞭に見立て、無手のイライザに襲い掛かった。

一般用h I Eでは動作制限のかかる速さと力。A A S Cの軛から逃れた証明である殺人者の動き。

皮を裂くのに十分な威力を持ったベルトがしなり、反対側からは肉を貫くのに十分な硬度を持った傘の先端が迫る。

三体のh I Eがイライザを狙う。

ならば残る二体は当然、アラトを狙う。

「うわああっ！」

イライザが三体を制圧するのに何秒かかるだろうか。1, 2発の攻撃なら耐えられるはず、と、アラトは頭を庇う。

結論から言って、その覚悟も防御も不要だった。

イライザに突撃していたh I E、傘を持った個体とイライザの位置が入れ替わる。

予備動作が一切ない移動と受け流しが瞬間移動じみた回避のトリックだ。振り終えた鞭は止められず、突撃の勢いが急にゼロになる

ことはない。

バックル側を先端にしていたベルトの鞭がh I Eの頭蓋を砕き、勢いのまま衝突した傘の先端が突き刺さる。

一挙動で二体のh I Eを無力化して、その移動の勢いを乗せた回し蹴りが残る一体の頭部を破砕した。

どき、と。イライザが倒したh I Eたちが頽れるのに先んじて、アラトを狙っていたh I Eたちが斃れ伏す。

「え？ ……え？」

何が起こったのか分からず、アラトはイライザの顔を見つめる。

説明を求めるでもなく、ただただ困惑するアラトに向けて、イライザが微笑した。

「アラトさん、お母様の言葉を思い出してください」

「レイシアの？ ……あ、同じタイプって？」

「はい。これは自慢ですが、わたしはお母様の次にハッキングが得意なんですよ」

アラトを落ち着かせるためか、思考を促し、冗談まで飛ばしてくれた。

ばくばくと五月蠅い心臓を服の上から撫で付け、アラトは大きく深呼吸した。

「行こう」

「はい、アラトさん」

入口まではもう少しだった。

全力で駆け抜ける途中、ここを出ても同じような状況だったらどうしようと恐怖が過る。

ユカは大丈夫だろうか。

環境実験都市で誘拐された時と同じ状況になっていると知ったら、あの時のことを思い出してしまうかもしれない。

心配に紛れて、サーバールームで告白したときのことを思い出して赤面したアラトは、幸いにもPTSDとは無縁そうだった。



『目標に損害無し。デコイの内部データを回収、オリジナルを破棄し撤収する』

灰色の都市部用戦闘服の上から光学迷彩を纏い、姿を完全に消し去っていた兵士たちが姿を見せる。

総数は5人。消音器付きの短機関銃を全員が装備しており、特殊部隊のようにも見える。

いや、要素からそう見えるだけではなく、彼らは実際に特殊部隊に属する人間だった。

『《金星》より命令更新。目標追跡は中断、帰投する』

『了解』

その言語と《金星》の名が示す通り、「中国の」という但し書きが付くが。

《金星》は中国で最初に設計された、世界で4番目の超高度AIだ。世界初の超高度AI《プロメテウス》の情報を人間のスパイが盗み出して造られたコピーであるとも言われている。その主要用途は中国人民解放軍の戦略AI。

避難警報が発令され、買い物客やスタッフが逃げ出し、警察組織が到着するまでの無人の数分間。何をするにも不足するその僅かな時間で、彼らは暴走していたHIEに端末を翳し、データを処理している。

高度に訓練された見事な手際を称賛するように、或いは迂闊さを嘲笑うように、無人のショッピングモールに口笛の音が響いた。

「へえ、人民解放軍の人なんだ。そうは見えなかったけどな」  
統一された動きで兵士たちが身をかがめ、銃口を向ける。

どれだけ驚いても指示なしで引き金を引くことのない機械じみた正確さだが、計り合わせたように同じタイミングで動くあたり、本当に機械仕掛けか。

「3世代前に流行ったらしいね、ソレ。洗脳とインプラントチップ、肉体改造手術による基礎運動神経のブーストと完全統一。突出した個ではなく均一な群の兵士を作り出すってコンセプトだったけ？」



ぎり、ぎり、と。大理石を模した質感のフロアを削る音が無人の構内に響く。

装飾の施された柱の陰から、向けられた複数の銃口を意に介した様子もなく、人影が悠然と姿を晒す。

「より安価で強靱な軍用hIEに取って代わられた時代遅れのヒトもどき。腹いせってワケじゃないんだろうけど……相手が悪かったね」

赤い髪が靡く。黒いボディースーツから露出した肩や大腿部には、兵士たちの身体にあるものとよく似たスリットがある。同じ機械仕掛け——否。

『軍用hIEか』

身長を優に超す槍のような武装デバイス。肉体改造により人間離れした視力を付与された兵士たちは、その側面に《BLOOD PRAYERS Mk-2》という刻印を見て取った。

「お母様とオーナーには——」

ほぼ無音で、hIE——紅霞の手にした武装デバイスが変形する。大型レーザー砲の形状へと変化したそれを指向され、兵士たちに恐怖と戦慄が走る。しかし、それらの感情は即座にインプラントチップによって興奮と戦意へ変換される。

『撃てッ！』

命令が下り、銃弾が横殴りの雨となって紅霞に殺到する。

しかし——

「——指一本、触れさせないよッ！」

赤く輝くレーザー光が発射され、銃弾の雨を遮る。

膨大な熱は金属ですら即座に蒸発させかねないが、ライデンフロスト現象によって形成された液体金属の被膜がそれを防ぐ。

結果、効果の背後にあった店舗や壁に幾つか浅い弾痕が刻まれた。しかし、そんなものは小さな被害だろう。

紅霞の正面には、近くに火山でもできたのかと言いたくなるような、溶けて溶岩状になった地面が広がっていた。

戦車の正面装甲すら貫通する熱量を受けて、兵士たちは骨まで蒸発

していた。仕事を終え大きく息を吐いた紅霞にワントempo遅れて、思  
い出したようにスプリングカラーが作動する。

「……やり過ぎたかな？」

酷く人間的な苦笑いを浮かべて、紅霞は遠くに聞こえてきたサイレ  
ンの音から逃げるように姿を消した。